

# 働きがいを実感できる「働き方改革」を

代表理事 小野武彦

昨今、「働き方改革」という言葉を耳にしないう日がないほど、働き方に関して様々な意見や取り組みが世の中では紹介されています。

建設界の働き方改革の前提には、建設界の深刻な人手不足をいかに解決するかということがあります。なかでも休日の拡大等は、若者をはじめ、幅広い分野で経験を積んだ皆さんにも参加して頂くために必要不可欠な取り組みです。

こうした中、受発注者ともに、週休二日推進や時間外労働削減に向けた様々な取り組みをおこなっています。さらに、昨年成立した「働き方関連法案」によって、今年からは「年5日以上の有給休暇の取得」が義務化され、特に建設業については、2024年から「時間外労働の罰則付き上限規制」が適用されることになりました。また、今年6月には、「新・担い手三法」が成立し、著しく短い工期での契約を禁止するなど、制度面の整備も進んできています。

しかし、そうした中で私にはどうしても腑に落ちないことがあります。働き方改革、特に労働時間を削減するためには生産性の向上が欠かせないにも関わらず、生産性向上の効果が出る前から労働時間削減の取り組みが先行され過ぎていることです。そもそも「働き方改革」とは、働く人がいきいきと働く、やりがいを持って働けるようにすることだと思のですが、そこが後回しにされているように思います。“四の五の言わず、まずやってみようや。そこから解が見えてくるかも。”という発想とは思いますが・・・。

戦後復興を目指し、政治制度や経済状況の変遷の中、産官学で叡智を結集し、インフラ整備を進めてきました。同時に繰り返される自然災害への対応の中で、総合技術力が発展してきたことは誇りとする成果とします。その過程で生じた長時間労働に伴って発生した諸事情の改善や、将来の少子・高齢化社会での産業像を模索して対策を講じる事は当然としても、労働時間の規制の遵守・違反に対する罰則を逃れるのではなく、その背景に照準を合わすことが大切でしょう。高い志や意欲を持つ技術者が、過去を否定することなく、学び、その上で将来を見越して働きやすい環境を創ることが大切ではないでしょうか。

最近、最も感動したのは、6月11日、探査機「はやぶさ2」が地球から約2億4千万キロ離れた小惑星「リュウグウ」へ2度目の着陸に成功したことです。

自らが人工的につくったクレーターの近くに降りて、地中にあった砂などを採取したとみられ、この世界初となる試みは日本の技術力の高さを改めて世界に証明しました。そして今後、2020年末までかかって地球にカプセルを届ける予定であり、これが実現すれば、太陽系が誕生した46億年前の痕跡が確認できるかもしれず、太陽系や宇宙の成り立ち、地球の生命誕生の解明につながると言わ

れています。

この多くの人々に感動、夢を与えたプロジェクトに携わった多くの研究者、技術者の成功は、10年を超す苦難、苦労があったからこそであり、その喜びは我々の想像を超えるものだと思います。しかしこの技術者の皆さんには、時間外勤務を強いられている認識や、やらされ感は決してないと思うのです。

いきいきと働ける、やりがいのある仕事ができる環境とは何か。それは、人間力、信頼、胆力備えたリーダーが継続的に組織を率い、上司と部下に信頼関係が醸成されている環境です。私は、社会に出て以来、数多の要請に応えるため、厳しい上司の指導の下で鍛えられ、経験を積み重ねることで幅広いお客様の信頼を得てきたと自負しています。今、この「鍛える」「鍛えられる」双方の信頼関係が希薄になっているように思います。上司から厳しく叱責され成長し、失敗があるから達成した時の喜びが得られます。仕事をやらされているのではなく、己が主体性を強く持っている組織が望まれ、そうした組織が強くなり、人が集まり社会に貢献することでしょう。

IT、AIを駆使することによって得られるのは「情報」であって、それを基に鍛えられた、積み重ねた経験で向き合い、使いこなすのは人です。膨大な情報から新たな変化を見つけ、仕事にも人生にも活かしていくために対処するのは人にほかなりません。私達が社会人、企業人として成長するためには、しっかりと基礎を鍛え、それを進化させる過程に最も注力すべきだと思います。

厳しいリーダーがいる、明るく、元気な職場、組織づくりに注力することは、環境の変化に柔軟に対応する一方で、変えてはいけない理念であり、時間の制約があってもやらねばならないことだと思うのです。

リバーフロント研究所並びにその活動を支えて下さっている皆さん！！

「はやぶさ2」の成功を見守っていた大勢の子供達が目を輝かせ歓声をあげている様子を見て、将来を担う子供達に感動を与えるのは私達の使命です。

リバーフロント研究所内に事務局が置かれている柿田川生態系研究会では、我が国を代表とする湧水河川の保全に取り組んでいます。柿田川の水辺で子供達が目をきらきらさせ、水草を採取し、石垣の隙間から水生昆虫を取り出していた様子が目に浮かびます。この自然生態系保全への活動は、全国でなされているのです。経済の発展とともに変容した自然生態系保全への取り組みは気候変動の影響もあり、その活動には終わりはありません。人、技術、組織の垣根、壁を乗り越えて活動の裾野を拡げていきましょう。